

松平家史料展示室 企画展

絵をたのしむ

～越前松平家の人々ゆかりの絵～

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 松平家史料展示室
- 会期 令和2年9月3日(木)
～令和2年10月6日(火)
- 休館日 9月28日(月)

絵画の楽しみ方には、様々な形があります。作品をじっくりと眺めることはもちろんですが、室内に飾って絵画をほかの道具を含めてコーディネートしたり、絵師が即興で絵画を制作するパフォーマンスを楽しんだりなど、日本では古くからいろいろな方法で絵画に親しんできました。中でも自ら絵を描くことは、最も身近な絵画の楽しみ方と言えるでしょう。

本展では、越前松平家の人々が自ら筆を執り描いた作品や、絵師の絵に賛を記した作品などを紹介します。江戸時代はたしなみの一つであり、明治時代以降は学校教育の一科目となった絵画制作ですが、それだけにとどまらず積極的に絵画制作を楽しんでいたことがうかがわれます。

1 絵を描く将軍

武家の棟梁である将軍たちは、武芸だけでなく、学問を修め諸芸を磨きました。諸芸のうち絵画については奥絵師に学んで絵画制作をしており、中には古画の鑑識やその模写も行ったという8代将軍徳川吉宗（1684～1751）や、絵師に絵画制作の助言をした11代将軍徳川家慶（1793～1853）など、熱心に絵画制作に取り組んだ将軍もいました。将軍の自筆画はただ描いて終わるだけでなく、諸大名や近臣に下賜されることもありました。将軍の自筆画拝領は名誉とされ、その作品は主従関係の確認や強化の道具としても用いられました。



紅葉に小鳥図 徳川吉宗筆 越葵文庫・当館保管



牡丹図 徳川家慶筆 福井市春嶽公記念文庫

2 吉邦と宗矩

歴代の福井藩主たちの中で、自ら筆を執った絵画作品を確認することができるのは、8代藩主松平吉邦（1681～1721）と10代藩主松平宗矩（1715～1749）です。

吉邦は財政再建や民政に積極的に取り組んだ明君として知られますが、文化面にも関心が高く、古歌や自詠和歌の写本や手鑑をいくつも遺しています。吉邦の絵画作品は1点のみですが、吉邦が和歌讃を書いた絵画が遺されています。

宗矩は中国や日本の古典籍を自ら書き写し、和歌を詠み、漢詩を作るなど学問を好み、諸芸を修めました。絵画制作を誰に学んだかは不明ですが、人物・花鳥を題材にした作品を制作しており、絵師から絵画を学んでいたと考えられます。



芦雁図 松平吉邦筆 越葵文庫・当館保管



松に獅子図(部分) 松平宗矩筆
大安禅寺蔵・当館保管

3 姫たちの絵画制作

江戸時代、大名家の女性たちも教養の一つとして、絵画をたしなんでいました。田安宗武女で13代藩主松平治好に嫁いだ定姫(?~1812)が残した作品からは、絵師の指導を受けていたことがうかがわれます。

明治時代、絵画は学校教育の科目の一つとして学ばれるようになります。16代藩主松平春嶽の娘たちは家庭教師の下で「画学」をはじめ、10歳前に華族女学校に入学するとまずは鉛筆画を学び、その後に洋画や日本画の学習へと進みました。

春嶽の娘のうち6女里子(1878~1955)は、女学校修了後も引き続き絵画を学んでおり、細川家(春嶽室勇姫実家)の御抱絵師杉谷雪樵(1827~1895)に指導を依頼しています。また、8女友子(1881~1952、後に千代子と改名)は、その作品が美術雑誌に掲載されたり、父春嶽の著作集『松平春嶽全集』(昭和14年発行)の見返に「ふたばあおい図」を描くなど、長く絵画制作を楽しんでいます。



牡丹に軍鶏図 定姫筆
越葵文庫・当館保管



春風燕語図 三條千代子筆
福井市春嶽公記念文庫

次回の展示

企画展示室

秋季特別展「北陸の古刀」

令和2年10月10日(土)~11月23日(月)

松平家史料展示室

企画展「勇士のよそおいー甲冑・陣羽織・火事装束ー」 令和2年10月10日(土)~11月29日(日)

展示解説シート No.134

令和2年9月3日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 藤原千穂

印刷 宮本印刷